

た。この人口急増は、大量に人口を収容する住宅団地の開発によるものであった。町田市における住宅地は主に、この住宅団地開発により形成されたのである。住宅団地開発は昭和30年代から始まり、昭和40年代前半でピークを迎えた。だが、オイルショックの影響や急激な住宅開発に対する見直しから、昭和40年代後半以降、停滞している。また、開発地域についてみると、初期は相模原台地上であったが、しだいに多摩丘陵へと移動し、現在は、北部丘陵地帯が中心となっている。丘陵地帯での住宅団地開発は、ほとんどが生活基盤が整備されないまま行われたため、市民生活に様々な問題を引き起こした。

こうした住宅団地開発、またそれに伴う個別的な住宅開発により、市内には、おおむね4つに類型できる住宅地域が形成されていった。最も市街化が進み、商業機能が集中している住商混在地域、公社・公団などが開発した大型の集合住宅が建ち並び、周辺の住宅地とは異質な性格を持つ大型団地地域、そして住商混在地域や大型団地地域の影響を受け、スプロール状の住宅開発が行われた一般住宅地域が形成されるなかで、住環境が良好で、居住水準が高い良好住宅地域も形成された。

良好住宅地域のなかでも、居住水準・住環境ともに特に秀れた高級住宅地といえる所は、町田市においては、玉川学園とつくし野である。

高級住宅地形成の要因を挙げてみると、玉川学園では、学園町として発展し、文教地区に指定されたことが、そして、つくし野では、東急の多摩田園都市の一環として計画的な都市づくりがなされたことが、考えられる。

つくし野地区は、ちょうど町田市内で急激な住宅団地開発に対する見直しがされ始めた時期に、基盤整備がされ開発された住宅地である。この地区は、東急の所有地が多くを占めていたため、一戸建ての家が統一的に建てられた。また、それらの住宅の水準は高いものであった。しかし、つくし野地区のなかでも、地元地主の所有地が多く残っているところでは、アパート・マンションなどが建てられ、また居住水準の低い住宅が供給されている。

最近では、こうした地元地主によるスプロール状の、そして土地を細分化した住宅地開発が増加しているが、それによって、せっかく区画整理により基盤整備がされながらも良好な住環境を保てない状態になっている。この対策としては、基盤整備を行うだけでなく、地区計画などを積極的に取り入れ、無秩序な住宅開発を防ぐことが必要である。

また、民間による良好な住宅地開発はどうしても地価高騰を招くので、公的主体による良好な住宅地開発が今後望まれる。

## 三崎町の生活基盤

上 出 よし江

まず本論の目的は、愛媛県西宇和郡三崎町の生活基盤を明らかにすることだ。それは、三崎町が山がちで細長い半島の岬、という極めて生活しにくいと思われる所にあつて、5,724人（昭和60年）という人口規模を持つことに、疑問を感じたからだ。

上記のような目的のために、まず自然条件と歴史的背景から、三崎町の成立過程を明らかにした。

次に三崎町成立（三崎・神松名両村の合併）後の人口の変化を、産業、生活の変化との関連において検討した。

以下に結論を書く。

三崎町は愛媛県の西南端にある。細長い半島の岬にあることは先に述べたが、三崎町自身も、東西に細長い形をしている。

集落の立地、歴史、主産業、人口変化、生活基盤を知る上で必要な、あらゆる点において、三崎町内の四つの地区（西地区、中央地区、東北地区、東南地区）は性格を異にしている。その境界が常に一致することからも、各地区が歴史的一体性を持つことから、この四地区を単位に三崎町の生活基盤を明らかにしていくことには、妥当性があると思われる。そこで、ここでは、各地区ごとの生活基盤を明らかにし、最後に三崎町の生活

基盤を総括することにする。

西地区では、中心集落中を除いて、集落は点在している。串以外、江戸時代後期以降の開拓集落であるせいか、各集落（与修、串、正野）の独立性は高い。各集落に小学校があり、5軒ずつほどの商店もある。岬にあって、あわびの好漁場を抱えるため、伝統的に漁業が盛んだ。養蓄池の利用によって、出荷調整も行っており、漁業全体の純生産は伸びている。そのせいか、この地区の人口減は緩慢で、各集落とも約400人の人口を保っている。

中央地区、東北地区は、どちらも古くから（江戸時代以前から）の首邑を持ち、生活圏、産業圏としての性格も似ているが、生活、産業両面で中央地区が優位にある。

各中心集落の中心地機能を見ても、中央地区の三崎と東北地区の二名津とでは落差が激しい。前者は人口1,677人（昭和60年）、商店数50（昭和57年）なのに対し、後者は人口674人（同年）、商店数17（昭和57年）だ。

主業は両地区とも柑橘栽培だが、中央地区が南側湾岸斜面という栽培適地にあるのに対し、東北地区は北側斜面という不適地にある。柑橘栽培の

歴史も中央地区で古い。生産量が中央地区の方が多いのも無理ないことと思われる。

人口減が中央地区で緩慢で、東北地区で顕著なのは、やはり、上の二つの事情ゆえのことかもしれない。昭和40年の人口は中央地区、3,562人、東北地区2,792人だが、昭和60年の人口は前者2,366人、後者1,360人だ。

東南地区と呼んだのは、ただ一つ、名取地区のことだ。ここは江戸時代初期、宇和島藩の軍用地として開け、三崎町内で孤立した集落であった。今も他集落への交通は不便で、人流も乏しいようだ（商業統計から）。主業は柑橘生産だが南風に面する斜面にあり、生活環境は人口の割に充実しているが、孤立性も高いので、人口減は著しい。昭和40年973人、昭和60年445人だ。

最後に三崎町の生活基盤を総括すると、まず三崎町全体の主産業は農業（特に柑橘栽培）、漁業であり、生活環境の上で、その中心は三崎集落にある。しかし、産業、生活圏は四分できる。その四地区が自然、歴史条件から見た地域区分、人口変化から見た地域区分と一致することから、自然、歴史条件と現在の生活基盤、生活基盤と人口変化との因果、相関を見出すことができる。

## 江の川上流域の水田の用水源

川 路 正 子

中国山地のふところに位置する江の川上流域は、山がちな地域で平地が少ないため、水田は谷間の傾斜地に所狭しと広がり、山と棚田という取り合わせがこの地域の卓越した景観となっている。本論は、江の川上流域を研究対象地域とし、水田の用水源の実態として構成、分布、立地要因を考察し、更に用水源別の取水施設や水利慣行及び用水の確保状態をみることにより、利用に当たっての各用水源の特性を明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、フィールドにおける観察と聞き取り調査を主体とし、加えて統計資料や文献の研究も合わせて行った。

研究の結果、江の川上流域の三大基本用水源は河川、溜池、天水その他で、構成は溜池と天水そ

の他、河川と溜池の複合用水源を含めて5つのタイプがみられた。地下水はなく、複合も二重のみであった。用水源の分布状態は、本地域の中央部分に溜池水源が広がり、その外縁に溜池と天水その他複合水源が分布し、両端に天水その他水源が分布するという左右対称な形状を呈している。この分布と地形との相関は明らかで、地形は水源の重要な立地要因であるといえる。溜池水源は三次盆地と世羅台地とにまたがって分布し、それをはさんで東部の作木山地付近と西部の神石高原が天水その他水源を形成している。すなわち、盆地や台地の比較的平坦地で溜池がつくられ易く、山地や高原といった急傾斜地では、雨水や出水などの天水その他に依存する他ないと思われる。両者の複合水源は、はっきりとしたまとまりはないが、